

2025 年 2 月 15 日（土）

担当：半田侑子

第 54 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を読む 「冬の旅」

【梗概】

近代美術を理解するためにイタリア文芸復興期（ルネッサンス）への関心を募らせた加藤は、ルーヴルでは飽き足らず、イタリアへ足を伸ばす。その旅先のフィレンツェでのちに夫人となるヒルダ・シュタインメッツと出会う。「冬の旅」は夏のイタリアの日差しが強い印象の回想と、ヒルダに会うためにウィーンへ向かう暗い冬のイメージが交互に重ねられる。

四国占領下のウィーンへ向かうオリエント・エクスプレスでのソ連軍兵士の対応をはじめ、ウィーン滞在は加藤に強い影響を残した。加藤はヒルダと公園や歌劇場で過ごし、ウィーン滞在を伸ばす。加藤はシエナでは未来を考えていなかったが、冬のウィーンではヒルダを愛しているという感情に気づく。加藤にとって初めての経験であった。ルネッサンスへの旅はウィーンで加藤自身が生まれ直すような経験になった。

【第 1 段落】列車

私は「オリエント・エクスプレス」の窓際の座席から、スイスの雪の山々が朝の陽ざしに輝きだすのを眺めていた。車内の暖房は効きすぎていて、前の日の午後にパリを発ち、その晩よく眠ることができなかった私の脳裡には、とりとめもなく、来し方行く末の思いが去来した。はるかに遠く来たるものかな。謡の節で私は自分にそうくり返していた。列車は中部ヨーロッパに向い、四国占領下のヴィーンまで、私をはこんでゆくはずであった。そこでは、ひとりの娘が私を待っている。私はその娘にフィレンツェで会った。

- (1) オリエント・エクスプレス…ヨーロッパにおいて国際寝台車会社（ワゴン・リ社）1883 年に運行が始まった国際寝台列車。西ヨーロッパ（パリ、カレー、オーステンデなど）とバルカン半島（コンスタンティノーブル（のちのイスタンブール）、アテネ、ブカレストなど）を結ぶので「オリエント急行」と呼ばれた。
- (2) パリからウィーンへの路線は二通り
 - ① ドイツ経由：パリからストラスブール、ミュンヘン、ザルツブルク、リンツを経由、ウィーン西駅
 - ② スイス経由：パリからナンシー、バーゼル、チューリヒ、インスブルック、ウィーン西駅

四国占領…オーストリアは 1945 年から 1955 年にわたり、連合国による管理下におかれた。四国とはソ連、アメリカ、イギリス、フランスである。オーストリアは 1938 年にヒトラーによってナチス・ドイツに併合され、ドイツの一つの州になっていた。この

ような事情で第二次世界大戦後のオーストリアは、戦勝国でも敗戦国でもないという特殊な位置にあった。第6段落を参照。

- (3) 四国占領…オーストリアは1945年から1955年にわたり、連合国による管理下におかれた。四国とはソ連、アメリカ、イギリス、フランスである。オーストリアは1938年にヒトラーによってナチス・ドイツに併合され、ドイツの一つの州になっていた。このような事情で第二次世界大戦後のオーストリアは、戦勝国でも敗戦国でもないという特殊な位置にあった。第6段落を参照。
- (4) ひとりの娘…ヒルダ・シュタインメッツ(1933-1983)、のちに加藤周一と結婚する。

【第2段落】回想

イタリアの文芸復興期は、私を圧倒していた。それは「観光」という言葉であらわせるようなものではない。よもやそれほどの色彩、それほどの大理石が、それほど豊富に、それほど徹底的に、途方もない力と才能とをあつめて、「感覚的な人間」の可能性を実現しつくしたのであったろうとは、想像もしていなかった。「近代ヨーロッパはイタリアの文芸復興期にはじまる」——しかしヴェネツィアとフィレンツェをみないかぎり、その文句は空文にすぎない。ルーヴル宮のイタリア絵画の蒐集でさえも、「文芸復興期」という言葉に、その名に適しい重みと経験的内容をあたえるためには、充分ではなかった。イタリアは決して私の考えを変えなかったが、歐洲の文化についてのどんな考えもが、直接または間接に、含まざるをえない一つの語に、決定的な内容をあたえた。私の好みはそのために変らず、一六世紀の盛時よりも私はクワトロチェントを好み、クワトロチェントよりもジョットオを好んでいた。しかしイタリアの経験は、私自身が何を好もうと、そんなことには全く意味がないといふことの経験にほかならなかった。一度フィレンツェを訪れた米国人ベレンソンは、そのまま囚われて、遂に生涯をそこに終った。美術館から教会へ、教会から別の美術館へ、一部屋のフラ・アンジェリコから次の部屋のロレンツォ・ロットオへ、私はとめどもなく憑かれたように歩きつづけていた。そして私と同じ道を同じ早さで歩いていたその娘に出会ったのである。数かぎりない大理石の女たちのなかで、生きて呼吸していたひとりの女。美術館の過去のなかから太陽と珈琲と街の雑踏の現在へ向って逃がれたいという望みが、そのとき強く私を捉えた。彼女を誘って、私はボボリの庭園のある丘に登った。丘の上からはフィレンツェが一望のもとにみえる。パラッツォ・ヴェッキオの茶褐色の塔やサンタ・マリア・デル・フィオーレの青い穹窿が、重層する屋根の上にそびえ、眼下にアルノオの水が流れていた。「いつまでフィレンツェにいるのか」「明日まで」と彼女はいった。「それから何処へ行くのか」「ヴェネツィアへ」「ローマへーしょに行かないか」と私はいった。「ローマは見てきたばかりです」「滞在を一日延ばしてシエナを見に行かないか」「シエナへ行くことは旅程に入っていません」「しかしおもしろいにちがいない。行ってみて無駄にはならないと思う……」。彼女は小柄で、学生のようにみえた。小さな写真機をもっていたが、それは日本人の旅行者が誇りをもって携えていた写真機にくらべれば、はるかに安いものにちがいな

った。額にかかる栗色の髪が、丘の上の風に動いていた。「あなたはシュトラウスを好むか」と彼女は突然いった。そのとき私たちは不器用な英語で話していた彼女はフランス語を話さず、私はドイツ語を話さなかった。「円舞曲を聞いたことがあるが……」。彼女は笑い出していった、「わたくしのいうのは、リヒアルト・シュトラウスのことです……」。私は子供の頃祖父がくちずさむイタリア歌劇の旋律を聞き覚え、パリではオペラ・コミックで、永井荷風のいわゆる「カルメンの名曲」を聞いたことがある。しかしその間のながい時期に歌劇についてはどんな経験もなかった。彼女は、すべての芸術的感動が、シュトラウスの歌劇の印象を思い出させるのだ、といていた。……。

(1) 第1段落はウィーンに向かう冬の「オリエント・エクスプレス」の車中の描写であったが、第2段落は夏頃にイタリアのフィレンツェでのヒルダとの出会いを描く。加藤がウィーンへ赴くのは彼女と会うためである。この章の前半はウィーンへ向かう列車の描写と、回想が効果的に重ねられている。ウィーンへ向かう空間的な移動と、回想を挟む現在と過去の時間の往復が、読む者にも旅の感覚を強く印象付ける。

(2) イタリア文芸復興期（ルネサンス）について

——私がどうしてイタリアに行ったかと言うと、五〇年代前半をフランスで暮し、またロンドンに行って、ナショナル・ギャラリーを見たり、パリでルーヴルを見たりしているうちに、ヨーロッパの美術を、ルネッサンスから見直したいと思ったからです。

ルネッサンスはフィレンツェとヴェネツィアから始まって全ヨーロッパに拡大したわけですから、近代の源泉としてのイタリア絵画を見ようということです。フランスでは中世に惹かれて、ゴシックを見て歩いたんですが、ゴシックの前に遡ると、ロマネスクはイタリアに豊富にある。しかし、イタリアに行って私が驚いたのは、ルネッサンス絵画の量です。

イタリアに行く前は、ジオットからレオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロまで、大体ロンドンとパリで見当がつくと思っていた。ルーヴルのイタリアの部門で、少しはイタリア絵画を見たという感じをもっていたんです。しかし見たのは九牛の一毛であって、“われ誤てり”という思いでしたね。こと美術に関しては、イタリア一国は他の全ヨーロッパに匹敵する。（『過客問答』かもがわ出版、2001、30頁）

(3) ヒルダ・シュタインメッツについて

——ヒルダは加藤と出会う以前から、宮城県に住む「菊池とも」という女性と文通をしており、加藤周一文庫に収蔵された菊池ともからの書簡に「S. Kato」の名が現れるのが52年9月である）。英語で交わされる書簡には、菊池ともがヒルダに書き送った日本の話題は、身近な風俗（例えば桃の節句や端午の節句）から華道、仏教、日本の寺社仏閣や教育制度にまで至る。菊池ともからの最も古い書簡の日付が1951年3月30日であるから、ヒルダが加藤に出会う以前から、日本や日本文化

に関心を抱いていたことがうかがえる。

パリで「日本は〔…〕多分世界からも忘れられていた」と考えていた加藤が、日本のことを多少なりとも知るオーストリア人のヒルダと出会ったとき、何を思ったのかは知るすべがないが、加藤がヒルダに惹かれて 52 年の冬に四カ国占領のただ中のウィーンを訪れたことは事実である。（半田侑子「『日本文化の雑種性』の成立について」『立命館大学人文科学研究所紀要』第 129 巻、182 頁）

（４）「感覚的な人間」

「感覚」という言葉がこの章では印象的な使われ方をしている。

（５）クワトロチェント→1400 年代、15 世紀ですなわち初期ルネサンスから盛期ルネサンスを指す。

（６）ジョット→近代絵画の祖。

（７）フラ・アンジェリコからロレンツォ・ロットオへ
→ウフィツィ美術館か。

（８）加藤はワルツ王のヨハン・シュトラウス（父子）だと勘違いしたが、ヒルダが言ったのは、多くの交響詩やオペラで知られるリヒャルト・シュトラウスだった。

（９）《カルメン》

オペラ《カルメン》にはオペラ・コミックで初演されたものと、その後台詞をレチタティーヴォに改めたレチタティーヴォ版がある。

元々ビゼーが作曲したのがオペラ・コミック様式であり、ビゼーが没したため、友人の作曲家エルネスト・ギローがレチタティーヴォを作曲。今日我々が親しんでいる《カルメン》はレチタティーヴォ版の方である。

【第 3 段落】列車

列車がオーストリアの国境を越えると、英国占領軍の士官が乗りこんできて、旅券と荷物を検査した。その手続きは簡単にすんだ。窓外の風景は、スイスの山々の壮観とは微妙にちがうものになりはじめていた。急な山肌が線路に迫り、雪に蔽われた針葉樹の森や、小川や、橋や、点在する農家が、忽ちあらわれては、忽ち後方に飛び去ってゆく。登山家の山でも、観光客の山でもない、遠い鄙びた山村の面影。私はその風景に魅せられて、眼を閉じることができず、硝子窓に顔をよせていた。スイスで何人かの客が降りたので、八人用の車室には、私のほかに一組の若い男女しかいない。彼らは私の向いの席で抱擁をくり返していた。

（１）オーストリアに入国、まず英国の占領する地域を通過したという。ここでの英国占領軍の士官の検査は第 7 段落と対になっている。

（２）「八人用の車室」コンパートメント

（３）「ヴィーン今昔」（『日本』講談社、1959 年 3 月号初出）の描写

——私はその頃はパリに住んでいて、一人の娘をヴィーンに訪ねようと思った。そ

の娘に会うためならば水火を辞せずとまでは考えなかったが、多少の不便を忍ぶ覚悟はあったのである。私はパリのオーストリア在外事務所に日本占領軍の発行した旅券を示し、何枚もの書類に住所、姓名、親類縁者の名まえまでも書き入れ、ヴィーン行き査証を申請した。在外事務の当事者は、われわれの政府には査証をあたえる権利がない、書類は四カ国の占領軍司令部を一廻りするのだから、いつまでかかるかわからないといった。事実私が査証をもらうまでに何ヵ月もかかったのである。

しかしとにかく私は査証を手に入れたのであり、後はスイスの通貨査証をもらうことと、「イスタンブール急行」の切符を買うことが残っているだけであった。私はある日小さな旅行鞆を携え、パリの東停車場からただひとりで出発した。汽車は、バーゼルからスイスへ入り、チューリヒを通過して、スイスの国境を越え、オーストリア領内へ入る。インスブルック、ザルツブルク、リンツ、それからヴィーンへ着くまでに、パリ出発以来およそ二四時間である。パリを夜おそく発ち、オーストリア領へ入る頃には夜が明けかかっていた。それは降誕祭の直後で、ティロルの山々と谷間には雪が深く、その上に紺青の空があった。私はいまだにその朝の雪景色の異常な美しさは忘れることができない……。 (『著作集』第10巻、261頁)

【第4段落】回想

シエナは素晴しかった。ピアッツァ・デル・カンプの石畳と噴泉と周囲の中世建築のみえる露台で、私たちは晩い昼食をとった。(献立表のなかでいちばん安いものを探して注文したが、「卓子掛けの代」が高く、税金と「心づけ」を加算して、支払いは、献立表の二倍になり、しかもその量は充分でなかった。しかし彼女が、硬い腸詰を携えていたので、小刀でそれを削って食べることもできた)。私たちは古い街を彷徨い、時の経つのを忘れた。夕暮れのなかにひっそりと立っていた町外れの教会のなかは暗く、広い本陣の奥に、子供を連れた黒衣の婦人がひとりひざまずいているばかりであった。私たちの傍を通りがかった神父がイタリア語で、「ここは祈るところで、人生を愉しむところではない」といったらしい、と私たちは思った。(彼女は実に流暢なイタリア語で「ちょっと御免なさい、停車場はどこでしょう」などといったが、相手の返事を必ずしも理解できるわけではなかった。私はイタリア語を聞いている間は、いつも解ったような気がしていたが、話がすんでみると、相手は何をどうしろといったのか、実は少しも解っていなかった)。秋の日は短く、フィレンツェへ戻る汽車に乗ったときには、トスカナの丘と平野は闇につつまれていた。別の車室で合唱するイタリア人たちの声が、車輪の音に混じって聞え、汽車が目的地に着けば別れて再び会うことはないだろうと考えながら、私は指の間に、細いやわらかい髪をすべらせていた。そのまま別れたくないと思うのに十分なほど、私たちの間には共通の過去があった。フィレンツェの丘の午後と、シエナの一日。しかしそれは、旅程を変え、ローマまたはヴェネツィアをあきらめるのに十分なほど、長い過去ではなかった。そのとき未来を考えていなかった私は、

純粹に感覚的な現在を生きていたのだろう。指の先のかすかな感触も、全身に浸みとおろ、「以心伝心」というほかないものを、私ははっきりと感じていた。

- (1) ピアッツァ・デル・カンポ（カンポ広場）はシエナの中心部にある広場で、世界一美しい広場と言われる。噴泉はフォンテ・ガイア（歓びの泉）であろう。



- (2) 「私たちの傍を通りがかった神父がイタリア語で、「ここは祈るところで、人生を愉しむところではない」といったらしい、と私たちは思った」
→この間に加藤とヒルダの関係がかなり進展し、恋人が教会でデートしているように見えたということか。

- (3) 「そのまま別れたくないと思うのに十分なほど、私たちの間には共通の過去があった。フィレンツェの丘の午後と、シエナの一日。しかしそれは、旅程を変え、ローマまたはヴェネツィアをあきらめるのに十分なほど、長い過去ではなかった。そのとき未来を考えていなかった私は、純粹に感覚的な現在を生きていたのだろう。」
→前章「二人の女」に描かれる、加藤に関係のない生活の記念品を多く持つ中産階級の女性との対比。加藤の描写では、加藤とヒルダはたった1日半で「共通の過去」を持つことができた。しかしそれは加藤の旅程を変更させるに至らなかった。未来を考えていなかった、ということは、当初は加藤はヒルダとの出会いを「純粹に感覚的な現在」、つまり刹那的な関係として捉えていた、ということになる。だが事実として、その時の加藤がそう考えていたかどうかは疑問が残る。
また第2段落で「感覚的人間」という言葉が出てきたがここでも「感覚的な現在」という言葉が使われている。

【第5段落】列車

「オリエント・エクスプレス」の途方もなく長い列車は、平野を走りはじめ、降りかかる粉雪が窓硝子に斜の線を引いた。向いの座席では、男がフランス語で女に説明していた、「これからロシア占領地帯に入るのだ。英国人の方は簡単だが、こっちは面倒だ、境界でどれほど待たされるか見当がつかない……」。その話しぶりから察して、男は土地に慣れているように思われた。話し方に少しずけずけとしたところがあるのは、占領国側の国籍によるのだろう。女は黙って聞いている。「ソ連の役人はロシア語しか話さない」とも男はいった。

(1) 第3段落でオーストリア国内に入り、英国占領地域を通過したオリエント・エクスプレスは、ロシア占領地帯に入る。英国人の話しぶりから、彼が何度かオーストリアの英ソ占領地域を横断していることがうかがえる。同じオーストリア国内にかかわらず、占領地域を超える際に国境を超えるかのような検査がある。

(2) 「ヴィーン今昔」(1959)の描写

——国境の手続には面倒がなかったし、第一私はそういうことに慣れていた。旅行に必要な程度には英独仏語を十分に操ることもできた。私は窓外の風景を眺めながら、もちろん、私の娘のことを考えていた。同じコンパルトマンのなかに相客はフランス人の男女がいるだけで、彼らは激しく抱擁をくり返し、窓外の景色にも車内の私の存在にも一切構っていなかった。しかしそのとき汽車はイギリス軍占領地区を走り、ソ連地区との境界へちかづいていたのである。(前掲書、261頁)

【第6段落】回想

パリへ帰った私は、イタリアで会った娘に絵葉書を送った。ヴィーンを見に来ないかという返事を受けとったときに、私の好奇心は動いた。娘に対しても、またその町に対しても。私は三〇年代に東和商事が輸入した活動写真を思い出していた。その写真のなかでは、円舞曲を踊る女たちの裾が輪になって回り、町の娘が「それは一度きり、それは二度と来ない」という歌をくちずさみながら——その歌は東京で流行した——ただひとり馬車に乗って、深夜の町を走りつづけていた。私はその町を実際にみたいと思った。私はまたベルリンと比較してヴィーンの占領方式にもいくらかの興味をもっていた。その頃のベルリンは緊張していたが、ヴィーンにはソ連側と西側の占領軍が共存して、しかも紛争の伝えられることがほとんどなかった。しかしそこへ出かけることは、たしかに、容易ではなかった。国の全体は四カ国により分割占領されていたが、首都のヴィーンだけは共同の管理のもとにあった。私はパリで査証を申請したが、英米仏露の占領軍当局がそれぞれ別に発行するので、手続きが煩雑であるばかりでなく、いつ手に入るか見当もつかなかった。その書類がようやく整ったときには、その年も暮れようとしていた。しかし身軽な私は、「オリエント・エクスプレス」の席を予約し、小さな手荷物をもって、降誕祭のまえに、北停車場へ行ったのである。師走のパリは雑踏し、一種の活気を帯びていた。心のなかで、私はパリに「さよなら」をいったが、列車が動きだしたときに、私の思いは、もはやそこにはなかった。……

(1) 第4段落ではまだ未来を予感させなかったヒルダとの関係は、葉書のやりとりによ

って続いていた。加藤文庫に残されたヒルダ宛キクチトモの手紙には加藤の名前があり、ヒルダが彼女に加藤との関係を相談していたことがうかがい知れる。おそらくヒルダにとっても加藤との関係は安易に考えたものではなかっただろう。

- (2) 東和商事が輸入した活動写真→『会議は踊る』であろう。1931年に制作、1934年に日本公開。加藤は「青春ノート」ノートⅦ「倦怠について」において『会議は踊る』について触れている。

——ウィーンの会議がウィーンの平民におとして行ったひとつのエピソード、街の洗濯屋の娘がロシアの大公に可愛がられると云ふ物語を描いた、ウーファアの有名な映画に「会議は踊る」と云ふのがあった。その映画は主題歌と共に、封切当時、一世を風びしたものだが、風びした理由はさまざま〔原文は繰り返し記号〕であらうし、又何であっても今は問題とするに當らない。(「青春ノート」ノートⅦ「倦怠について」1940年7月23日付、管理記号 653-10)

- (3) 「ヴィーン今昔」(1959)の描写

——私の経験でヴィーンの「昔」というのは、今から五年ばかりまえのことにすぎない。その頃のヴィーンは四ヵ国占領下にあった。オーストリアの国全体が、ソ連・イギリス・アメリカ・フランスの占領地区に別れ、ヴィーンだけは独立に四ヵ国管理のもとにあったこと今のベルリンに似ている。しかし管理の実情にはすでにその頃相当のちがいがあった。ベルリンではソ連占領地区との境界がはっきりしていたが、ヴィーン市内では四ヵ国占領地区の境界に査証検査も何もなかった。その間の交通は全く自由であり、しかも市の中心部、第一区は四ヵ国の共同管理に属していた。ベルリンには有名な空輸をはじめとして紛争が絶えなかったが、ヴィーンは比較的しずかで占領四ヵ国相互の間に激しい衝突はおこらずにすんでいたのである。しかし外国の軍隊による占領が当の市民にとってはもとより、外国人の訪問者にとってさえ不便なものであったことはいうまでもない。(前掲書、260頁)

【第7段落】列車

英国の占領地域をしばらく走るかと思ううちに、突然列車がとまった。そこには停車場もなく、町もなかった。車掌が廻って来て、窓の日除けをおろした。「両側に自動小銃をもった兵士がならぶのだ」と向いの男が、半ば連れの女に、半ば私に向かって説明するようにいって、しばらくすると、二人の赤軍の兵士が車室に入ってきた。私が赤軍の兵士に出会ったのは、そのときがはじめてである。二人とも若くて、素朴な農家の男のような顔をしていたが、少しも表情を動かさなかった。向いの男女のさし出した旅券を黙ってうけとり、頁をくって見て、黙って返した。それは決して粗野な態度ではなかった。しかしただ事務的というのとは——それはそうであったにちがいないが——どこがちがっていて、妙にぎごちなかった。私が旅券をさし出すと、その頁をくって見ていたが、まえの男女に返したようにすぐ

には返さない。その間、誰も一言もいわずにながい時が経ち、さらにながい時が経った。旅券に不備のあるはずがない、と私は自分にいいきかせていたが、兵士は、突然、旅券から眼をあげると、ロシア語で何かいいはじめた。「国籍を訊いている」と向いの男がフランス語で説明した。「日本人」と私はフランス語でいったが、通じない。現地のことばがドイツ語であったことを思い出し、つづけてドイツ語で同じことをくり返したが、旅券を手にした兵士と、その傍に黙って立っていた兵士と、その二人の顔には、全く何の反応もあらわれなかった。フランス人が「日本人」とロシア語でいい、兵士はまた旅券の頁をくりはじめた。私はいくらか不安を感じ、しかしそれ以上に事の馬鹿馬鹿しさに苛立ってもきた。旅券は百科辞典ではない、そう沢山のことが書いてあるわけではなかろう、と私は思った、三分で解らなければ、三時間かけても解らぬだろう。五分経ち、十分経ち、遂にその兵士は、黙って旅券を私に返し、そのまま車室を出ていった。私はほっとしたが、汗をかいていた。その次に列車が停ったときに、向いのフランス人たちが降りた。その代りに年配の赤軍の将校が入って来て、さし向いの窓際の席に坐った。私は俄かに空腹を感じ、その駅で買った熱い腸詰に芥子をつけて、食べた。それから《ゴーロワズ》を一本抜いてゆっくりと吸い、パリでもとめた独文法を開いた。独文法はそのときなお私に、はじめてドイツ語を習った駒場の高等学校とその寄宿舎の生活を思い出させた。寄宿舎の学生たちが好んで唱っていた「寮歌」の節のいくつかが甦った。しかしその文句を私はほとんど忘れていた。向いの将校は、降りしきる雪のほかには何も見えない窓の方に視線を向けたまま、エジプトの彫刻のように、身動きもしなかった。列車はヴィーンに近づいていた。そこではひとりの娘のほかに、私は誰も知らない。その国の言葉は私の耳に疎く、風習は予測するのに手がかりがなかった。雪につつまれた野の涯に、やがて一つの都会があらわれるであろうということさえも信じ難いほどであった。異郷、《dépaysement》、幾山河、《au bout du monde》……私は日本語とフランス語を混ぜて、それらの言葉の全体が示唆する一種の心理的状态をみずから形容しようとしていた。日常生活の慣習の体系の外へ投げだされたときに、私は私自身を発見するだろう。私の感情生活の奥には何があるか。私は一体何を望み、何を犠牲にし、何をする可能性をもっているのか。

(1) 赤軍の兵士の検査→第3段落の英国占領軍の士官の検査では「その手続きは簡単にすんだ」が、赤軍の兵士の検査は闇雲に旅券のページを繰り、フランス語もドイツ語も通じず、非常に時間がかかった。加藤の向かいに座っていた欧州の男女の旅券はすぐに返していた描写があることから、加藤が東洋人のため長引いたのかとも読める。

(2) ①「ヴィーン今昔」(1959)の描写

——境界は野原のまんなかであった。汽車は突然そこで止り、窓に垂幕をおろしたと思うが、その辺のことは確かに覚えていない。というのは、武装したソ連の軍人が乗りこんできて、コンパルトマンの扉をあけたからである。私はさしだすべきものの、つまり旅券をだまってさしだした。二人の軍人は、私の旅券をしらべ、何かい

った。それはあきらかに質問であったが、私には何のことか見当もつかなかった。相手は質問をくり返す。私は困惑して、まずドイツ語で、それから英語で、最後にフランス語で会話を試みようとしたが、まるで役にたたない。ソ連の軍人は私の旅券を交互に手にとって眺め、何やら相談し、相談のあげくまた私にはわからぬ言葉で質問をくり返すだけである。私は閉口した。すべての外国人旅行者にロシア語の知識を要求するのは、無理だろうと思ったが、どうにもならない。

相客のフランス人の男が、フランス語で私に、何の目的でヴィーンへ行くのかときいているようだといったのは、そのときである。私は助け舟にほっとして、人を訪問するのだと答える。フランス人はそれを何とかロシア語にして相手に通じさせたいらしい。その男の通訳で会話がはじまった。おまえは何人であるか。日本人である。おまえの知人は何人であるか。オーストリア人である。しかしそれだけのことに途方もなく長い時間がかかった。そして結局何事もなく私は旅券を返してもらった。二人の軍人は別のコンパルトマンへ向って出て行く。「いやはや、これはなんという話だろう！」とフランス人がいった。「通訳をしてくれてありがとう」と私はいった。その後しばらくして汽車は動きだした。

私は、その後占領軍当局とどういう種類の困難にも二度と出会わなかったが、はじめて出会ったソ連の軍人は、ながく私の印象に残った。彼らは遠い国から来たのである。私がオーストリアにおいて異邦人である以上に、彼らは異邦人であるようにみえた。私はその国の言葉を話し、その国の娘を少くとも一人は知り、その国の人民に対し何らの権力ももっていない！

私はヴィーンでもそういうことをあらためて感じた。(前掲書、262-3 頁)

②加藤周一文庫デジタルアーカイブ【684-2】〔詩作ノート〕の描写

Zwei Wochen in Österreich〔オーストリアの二週間〕

①Occupation〔四カ国占領〕

Sovi soldat qui examine le passeport et question en russe

Il ne comprend ni l'anglais ni français, ni deutsch.〔パスポートを検閲し、ロシア語で質問するソヴィエトの兵士は、英語もフランス語もドイツ語も解さない〕

- (3) ゴロワーズ…フランスの煙草。非常に特徴的な香りで知られる。
- (4) 「向いの将校は、降りしきる雪のほかには何も見えない窓の方に視線を向けたまま、エジプトの彫刻のように、身動きもしなかった」
→第2段落ヒルダの描写「数かぎりない大理石の女たちのなかで、生きて呼吸していたひとりの女」との対比。
- (5) 「異郷、《dépaysement》、幾山河、《au bout du monde》」

《dépaysement》…異なった環境・習慣の中に身を置く居心地の悪さ、違和感。シュルレアリスムの技法を指す言葉としてよく知られる。

《au bout du monde》…世界の果て

- (6) 「日常生活の慣習の体系の外へ投げだされたときに、私は私自身を発見するだろう。私の感情生活の奥には何があるか。私は一体何を望み、何を犠牲にし、何をする可能性をもっているのか。」

→シエナでは考えていなかった「未来」について、数ヶ月経て、ウィーンへ向かう加藤は考えていたということになる。またこの章の後半を予感させる。

以上